

第3回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和7年9月25日（木）10時～15時 参加者：38名（うち市町村等から27名）
会場：秋田県生涯学習センター講堂

「家庭での困り感や様々な課題に対応した家庭教育支援を進めよう」というテーマのもと、今年度3回目の研修を行いました。午前は子どものネット利用について、午後は通級指導教室での取組について、それぞれ専門家を招いて講話していただきました。どちらの講話においても具体的な事例をもとにしたワークショップが行われ、参加者にとって実りの多い研修となりました。

【午前の部 講話・演習】

子どもたちのインターネット利用について考える研究会事務局の **高橋 大洋** 氏に、「子どもたちのネットの楽しみ方と保護者のかかわり方を学ぼう」というテーマでご講話いただきました。高橋氏は、子どものネット利用を、その発達段階に応じて「乳幼児」「未就学～低学年」「高学年～高校生」の3つに分けて捉えることを提案。それぞれの段階で利用される主なデバイスや、主要な利用内容が異なることを確認し、子どものネット利用は「遊び」であることを強調されました。また、子どもは18歳を迎えるまでにネットに関する知識を身につけ、失敗を通じて経験を積む「実践」が必要だとも述べられました。大人はともすれば「性暴力被害」や「金銭トラブル」などに目を奪われがちだが、「同級生とのコミュニケーション不全」や「長時間利用」など、頻度が高く後を引く可能性がある問題に目を向けるべきだとしました。子どもにスマホを渡す際は、失敗やトラブルが必ず起きることを前提に、「困ったら一緒に考える」というメッセージを伝えることが大切だとも述べられ、支援する大人に期待される役割についてご教示いただきました。演習では、子どものネット利用に悩む保護者への寄り添い方についてグループでケース検討を行い、参加者は具体的な対応策を考え、さらに学びを深めることができました。



【午前の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・ ネット利用について、大人だけでなく、子どもの目線にも立って利用する大切さを学びました。
- ・ 保護者は子どもの「コーチに」「リーダーに」「フォロワーに」という言葉が参考になりました。
- ・ 利用する子どもの年齢に応じて保護者のかかわり方が変わることについて、専門的な知見をいただくことができました。

【午後の部 講話・演習】



能代市立能代第二中学校教諭の **金子 豊** 氏に、「児童生徒のニーズに応じた通級指導教室における取組」と題してご講話いただきました。冒頭、通級指導教室とは通常の学級で大部分の授業を受けている生徒が、個に応じた指導を受ける形態であることや、指導対象は言語障害、自閉症、LD、ADHDなどの障害があり、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする児童生徒との説明がありました。また、通級指導はオーダーメイドの指導が特徴で、生徒一人一人の特性に応じた指導内容や方法を選択しているとのことでした。活動内容は多岐にわたり、「心理的な安定」を図ることを目的とした活動（例：マインドフルネスの3呼吸）

や、注意力・ワーキングメモリーを高めるためのアセスメントテストとトレーニング、コミュニケーション能力を高めるためのゲーム（例：アドジャン）などが用いられ、参加者は実際にそれらを体験することによって通級指導教室に対する理解を深めることができました。さらに、具体的な実践エピソードも多数紹介され、最後には、通級指導教室の教員が不足しており、個別の指導を行う上で課題となっている現状も共有されました。

【午後の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・ 通級指導教室の実際について、体験と事例を通して理解することができました。
- ・ 本当に生徒一人一人が大切にされていることが伝わってきました。
- ・ 本人を含めた周囲の困り感を的確に捉え、指導していくことの大切さがわかりました。